源氏物語

次第

これも本なし菩薩のちかひ〳〵石山

口半詞

寺にまいらん　是は安居院の

法印にて候我石山の観世音を

信じ常にあゆみをはこひ候

ぎふ成まて参りやと思ひ候

上哥

時も比も花の都を立出て〳〵

嵐よはや散しゝ夕波の白川おすきて

源氏乃物語ゆにのこしても浅
たのみ少なき心の内く
松風も絶ては形見と成物を思
ひし山秋下紅葉も心の色
小出そ見えんあい雨しや
のぞて秋も深実になるとわ共
縁おそまわ心にて我折荷婦の

うけ伐見まへざもこの流くし哉
女性の憂きぬ乃みはをとわ
ぢの巻乃とくにみえ竹ハ最
観の折分流の風字流讃ひ
やは咲花色のがさし香咲ぬ共
志てこのしれ怨ふらふうろうとて
枯野の蘇芳も末ハ物末と挑らい

必ず来りと志ろしめされや
思のきぬに出しし思ひあまりの
言葉のすゑとはいはん紫式部
了し家まうすりは凄し
なか／＼我姿見えし面影はきのふ
見し姿あらはし成りける跡は
夢のうちに心をなきさを決

上同
成をそ出る氏安宮の月も
心きよ石山寺乃観音をも
さそふ風の前栽へ見えしふみの
物語光源氏乃跡とかく
あらき数案内事やかなる城に
市龍よ下りつゝ勢へまで　いや
夢範なとはおもひもよらすす

一生夢のごとしと思ひて
百年を縮む槿花一日たゞ同じ
夢よ数ならぬ紫式部だのみ哉
鉋つゝ石山寺近所を都見にこそわ
内でこの物語を筆に万事
さまとも路よ供養を勢さまし
紺よもわが寫机の雲も晴ぬらし

なあひ果さし光孫りむゝ待て
心中乃所願をおこしひと浮の
尽物よ寫しゞ近所の脈を覚く
有世や光源氏乃幽霊成ホ正覚
抑桐壷の夕霞烟りえやすり
法性乃空ふいつわりし木々の
よ帚木云ふ葉は法の内よ覚樹乃

男女來迎をうけし有無や
西方淨土の來迎寶蓮の臺をわ
捨てし紫式部が後の世扱だにまき
折へと讀みし鐘うちならし寶
廻向も院をそわぬ 寅西白や
舞人の袂をも翻へしわ恭
養をも遂可被りな 光源氏の

傳語を用小澤の力まんでは菩提も
生殺せ逢乃花紅孫ハ影もしや
巻ゆめ能兔秋のうわ 夕まれ
影もなし 槿乃露稲妻の巻
ばかなるあさくなしぬとめな然
浮世や続く物を案じるに小く
紫式部と申すは石山の観世音

佛は此世にありけるがしく
源氏の物語見るも道大事乃
世と人まよふ（菩薩）は方便ぞかし
そ数なきのひのな思ひは夢の
り義は—（戈）ゆめ莫あひ為の
おとハあかく